

思春期女子の自己形成についての一考察

「演じ」体験の意味を通じて

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域

こころの教育」の一手法として、学校現場における演劇的表現活動が提唱されている。しかしながら、「演じ」を用いた教育活動は、今後の定着が待たれる分野であり、子ども達にとっても、「演じ」はまだ馴染んだ表現方法ではない。

中学校の演劇部には、自己表現が下手くそで不器用な女子生徒が多い。その不器用な子たちが本番になると実に堂々と役を演じきる。なぜ彼女らは演劇部を選び、舞台の上であれだけの力が発揮できるのか？本研究は、思春期における「演じ」の体験、中学校内の演劇の体験が、彼女らの思春期の課題に対しどのような力を与えるのかについて、思春期女子の心理的特徴を鑑みながら考察を行うものである。それは自己表現が下手くそな女子生徒のみでなく、思春期の子ども達が「自分探し」の足がかりに何を求めているのか、また多様化する子どものこころの問題に、「演じ」の体験がどのように作用するのかという課題に対しても有意義であると思われる。また本研究では思春期女子の「纏い」の心理についても考察を行い、「纏い」の面からも思春期の「演じ」を考える為の一考察を試みている。

研究の方法として、中学校在学時に何らかの“不器用さ”が見られた生徒7名に、演劇についての9つの質問事項を含む半構造化した面接取材を行い、その逐語記録をGTの手法に従って分析した。また、教諭3名と現役の演劇部員への取材も平行して行った。GTにより生成されたカテゴリーは、ダイアグラムと呼ばれる図式に表した。このダイアグラムと逐語記録をもとに、各自についての事例研究的な考察を行った後、9項目についての7人のデータを統合して、「演じ」についての考察を試みた。7人の女子と「演じ」の物語については、各々が個性的な事例ながらも、「演じ」が当人が自分らしい生き方を探す過程において、不可欠の役割を果たしていることがうかがわれた。今でも演劇への夢を追いかけている“言葉の出ない子”ユズ。強力なサポート者の守りの中で、時にスゴイ自分を求めて暴走する大人しいワタゲ。自身の、早熟したクールな感性と不器用さとの不協和音に苦しんでいるツクヨミ。優等生としての自分にも演じることの違和感にも耐えられなくなったジジ。女性にも男性にも嫌悪を感じ、今の自分でなくなるために男装しているシュン。自身の代弁者となる役との対話によって、自分を見つめ直し変えてゆく手がかりを得たヤヨイ。演劇によって自分の溢れ出る内面世界の出し方を模索しようとしているソラ。

彼女らのインタビュー分析からは、以下のようなことが浮かび上がってきた。彼女らは、演劇の良い思い出とごっこ遊びの経験があり、空想好きで表現欲求が強く、目立ちたいと思う反面、コミュニケーションに引け目を感じており、自信がないが何かを求めている子であり、自分の求めているものが演劇を通してかなうのではないかという期待を持っていた。演劇は何かを探すための手段であり、自分を守るための手段であり、自己表現の手段でもあった。演劇は、現実の嫌なことを別の場所に置ける「逃げ道」だったが、同時に「逃

げる」ということが、「前向きに進むこと」の一つの形として語られている。彼女らにとっては、演じている自分こそが、表現したい自分である。役の仮面は別人になる為ではなく、安心して自分を語るための手段である。役は彼女らにとって特権であり、時には友人よりも大事で非常に都合がよい存在になる。また役づくりの作業は、彼女らに短期間の内に様々な学びや気づきをもたらした。舞台の上演中は関係のリセットが起こる。彼女らは、自分がもてなす側に立っているという強い使命感や責任感、優越感を感じており、舞台上では、観客である生徒とは何の関係もない人物としてそこにいることができる。舞台には非日常と瞬間性がある。非日常の限定された時間内で行われ、ナマの瞬間を楽しむものだから、彼女らは尋常ではないパワーが出せる。演劇の枠に守られて、彼女らは安全に自由に振舞うことができるが、同時にナマの視線は絶対に必要なものになっている。観客は、彼女らの表現活動にとって必須の役割を果たす。その観客が、生徒であるということに意義がある。中学生である自分達が、いつも同じ校内にいる中学生の心を動かせたと感じるところに、自尊心が生まれるのではないかと思われる。劇には、物語や台詞が決まっており、練習が可能で、仲間と協力し合い、自分が必要とされる安心感がある。また、一つの世界を自分の手で作り上げてゆく喜びがある。演劇の経験は、自信や自己肯定感を生み、彼女らを力づけ安定させた。しかしまた、次なる課題の発見にもつながっている。

「纏い」については、思春期の女子に特徴的に見られる学ランとアニメコスプレについて考察した。学ランの「纏い」には、タブーを侵してみたい欲望や、学ランを着ることによって理想の異性と一体化しようという願望、女性への嫌悪感から起こる男装への憧れが見られた。アニメコスプレでは、衣装の選択の際に、各自の性への意識が現れていることがうかがわれた。「纏い」にもまた、「演じ」と同様に思春期女子の課題と多く結びつくものがあつた。「纏い」から見えてきた「演じ」の一側面としては、性への意識の潜在と、“何かをやらかしてみたい衝動”の昇華があると思われる。

彼女たちの課題は、思春期の子どもに共通するものである。演劇というツールは、見ている側の生徒たちの「自分探し」にも有効であろうと思われる。現状において、クリアすべき課題は多いが、多様化した心の在り様を見せる子ども達を抱える学校現場においては、教育的戦略としての演劇の活用を模索することは、充分意義あることと思われる。